

経済・金融 フラッシュ

6月マネー統計 ～リスク性資産の伸びが反転

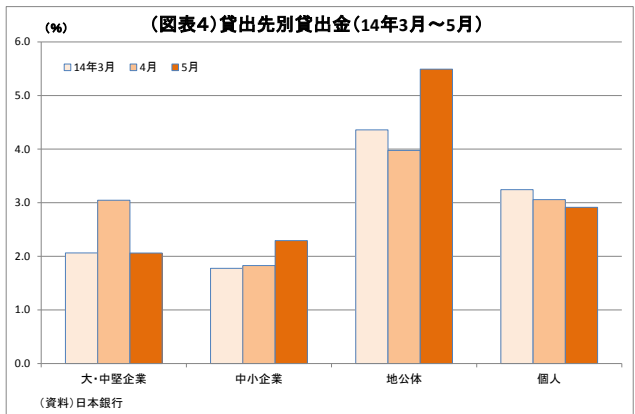
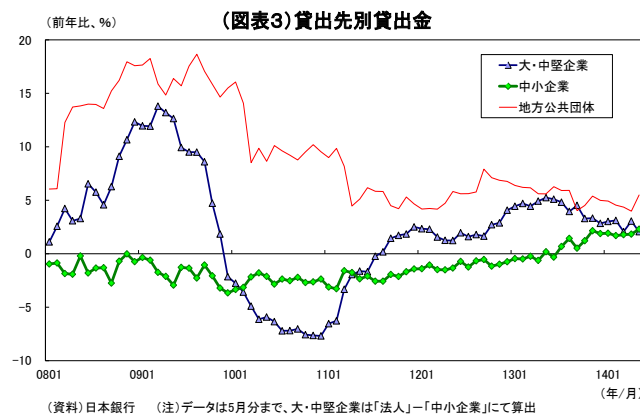
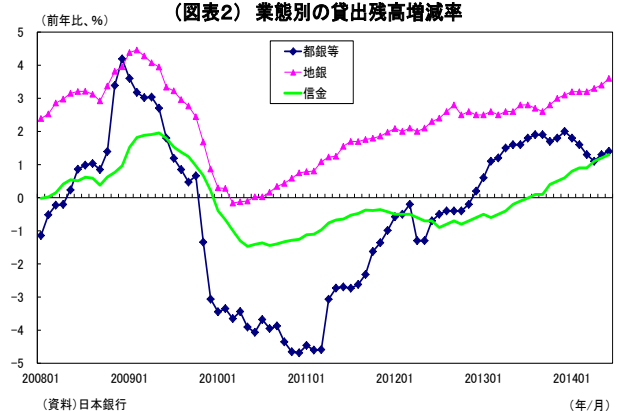
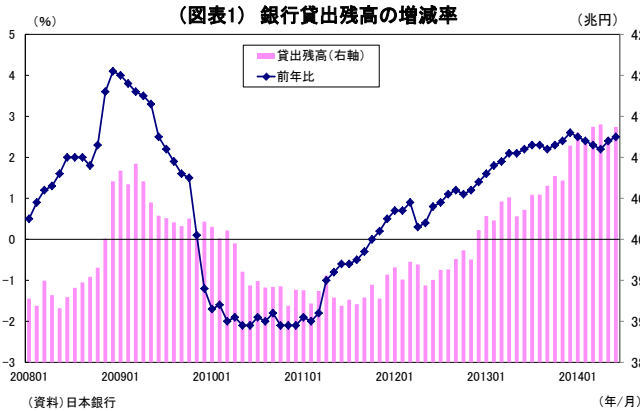
経済研究部 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向：2ヵ月連続で伸び率拡大

日銀が7月8日に発表した貸出・預金動向(速報)によると、6月の銀行貸出(平残)の伸び率は前年比2.5%(前月は2.4%)となった。伸び率の拡大は2ヵ月連続となる。業態別の伸び率では、都銀等が前年比1.4%(前月は1.3%)、地銀が同3.6%(前月は3.4%)とともに拡大している(図表1～3)。引き続き、M&Aや不動産向け等が牽引した模様。

今年3月から5月までの貸出先別貸出金を見ると、もともと大口の動向などで振れやすい大企業や地公体向けの伸び率は方向感が掴みにくいものの、中小企業向けがじわりと伸びを高めているのが注目される。貸出の裾野は引き続き広がりを見せている。一方、これとは逆の動きを示しているのが個人向けだ。消費増税に伴う住宅販売の落ち込みが住宅ローンの減速として現れている可能性がある。

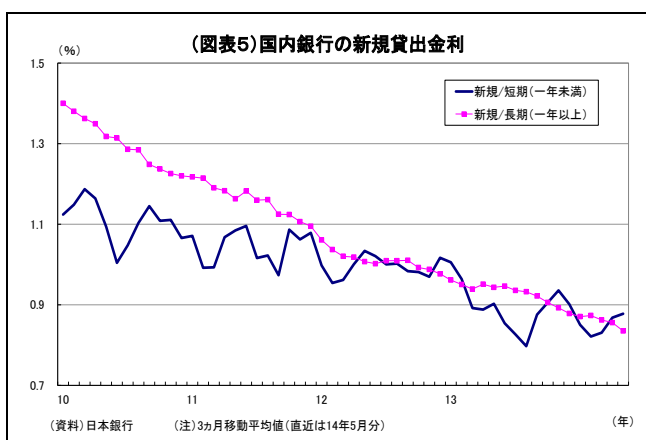


そして、今後は拡充された貸出増加支援資金供給の影響が注目される。6月分から新制度に移行し、金

融機関は貸出増加額の2倍相当額の低利・長期資金供給を日銀から受けられることとなった。6月分の資金供給結果(6月20日貸付済み)は4.9兆円と前回3月分の3.5兆円から大きく増加している。今後も四半期ごとに供給されるこのマネーがさらなる銀行貸出に回るのかが注目点だ。

一方、金利の低迷については、ますます拍車がかかっている状況にある。新規貸出のうち、長期(一年以上)は5月に0.815%と再び過去最低値を記録した(図表5)。

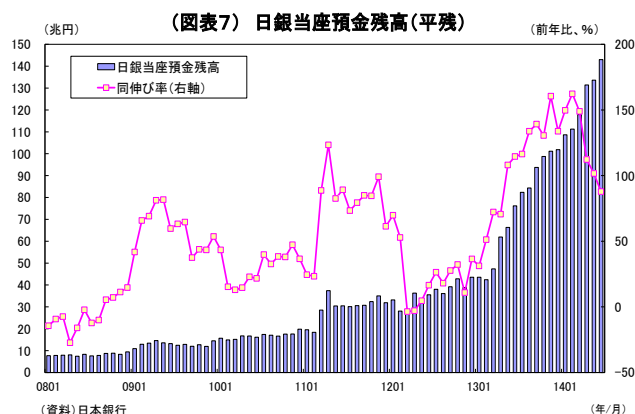
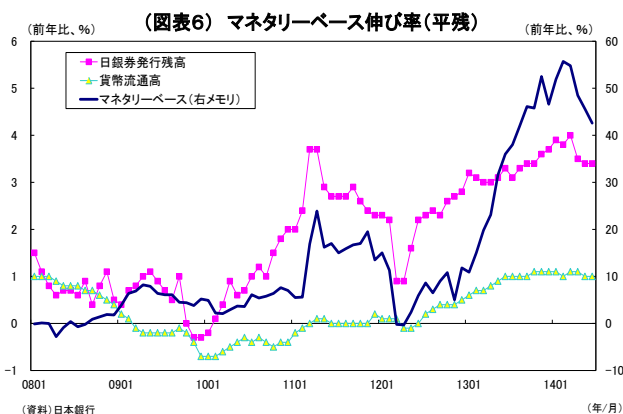
日銀の異次元緩和や低利資金供給などが金利抑制に働いているうえ、銀行間の厳しい貸出競争が影響していると考えられる。6月からの上記貸出増加支援資金供給の拡充も、さらなる金利低下圧力になると考えられ、金利の低迷は続きそうだ。

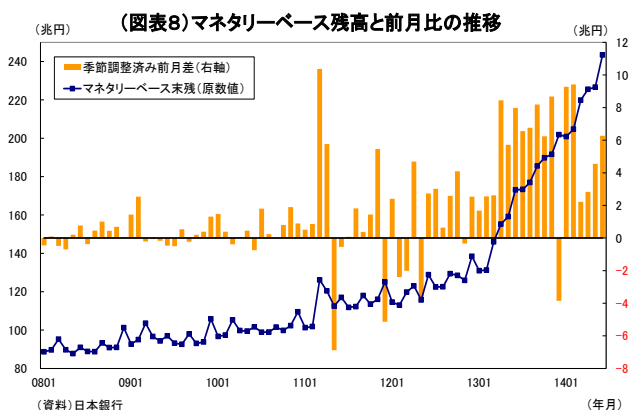


2. マネタリーベース：順調に拡大中

7月2日に発表された6月のマネタリーベースによると、日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示すマネタリーベース平残は233.2兆円と16ヵ月連続で過去最高を更新した。前年比伸び率は42.6%(前月は45.6%)と前月からやや縮小。日銀当座預金の伸び率が87.8%(前月は101.6%)と14ヵ月ぶりに100%を切った影響が大きい。同伸び率は4ヵ月連続で縮小しているが、これは異次元緩和開始から一年が経ち、伸び率の分母である前年の残高が急ピッチで膨張していることによる。前年比の増加額で見ると、ここ数ヵ月は70兆円前後で推移しており、増加ペースが鈍っているわけではない。

なお、月末残のマネタリーベース残高を見ると、6月末時点で243.4兆円となり、月間増加額は16.8兆円に達した。もともと6月は国債償還が多く、日銀当座預金へ資金が流入しやすいことに加え、上記のとおり、今回から拡充された貸出増加支援資金供給による日銀から金融機関への資金供給が4.9兆円(前回3月は3.5兆円)に達したことの影響もあったとみられる。日銀はマネタリーベースを「年間約60~70兆円」ペースで増加させ、14年末に270兆円とする見通しを掲げている。単純に月換算すると毎月約5.0~5.8兆円の増加ペースとなるが、6月の増加額はこのペースを大きく上回った形となる。



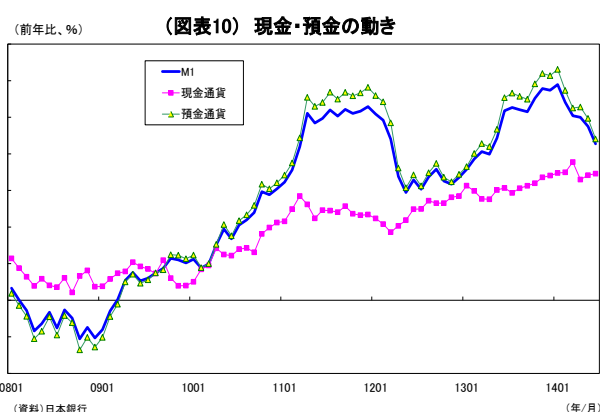
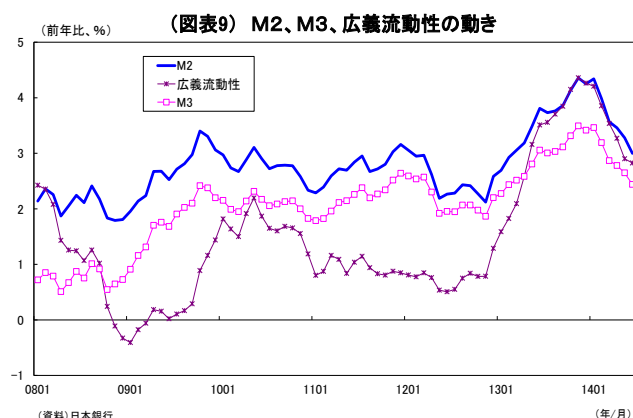


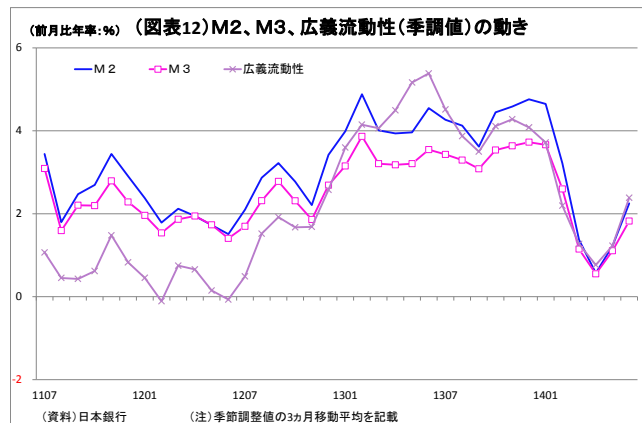
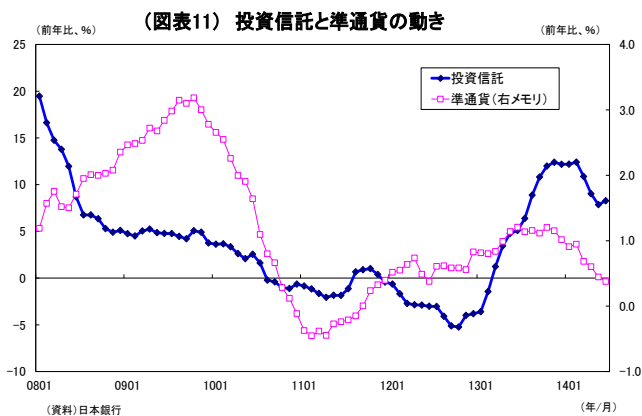
また、季節調整済みのマネタリーベース(平残)の月間増加額も6.3兆円と、上記の見通し達成に必要な増加ペースを上回り、4ヵ月ぶりの規模となっている。今年に入ってからの6ヵ月平均で見ても月間5.8兆円増と上記の見通し達成ペースをクリアしており、順調なペースでマネタリーベース拡大が進捗していると判断される(図表6～8)。

3. マネーストック：リスク性資産の伸び率が反転

日銀が7月9日に発表した6月のマネーストック統計によると、市中通貨量の代表的指標であるM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高の伸び率は前年比3.0%(前月は3.3%)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同2.4%(前月は2.6%)とそれぞれ5ヵ月連続で縮小した。伸び率はそれぞれ16ヵ月ぶりの低水準にあたる。預金通貨(普通預金など)の伸び率が前年比4.4%と前月(改定値5.0%)から縮小したことが主因であり、好調な企業収益を背景とした法人税納付額の増加が影響した模様。

また、M3に投信や外債といったリスク性資産等を含めた広義流動性の伸び率も前年比2.8%(前月改定値は2.9%)と7ヵ月連続で縮小している。ただし、内訳では、M3の伸び率鈍化が効いた形となっており、金銭の信託(前年比4.9%→5.2%)や投資信託(元本ベース、同7.9%→8.3%)、外債(▲0.1%→0.8%)といったリスク性資産の伸びが拡大に転じたため、M2やM3に比べて6月の伸び率縮小は小幅に留まっている(図表9～11)。





このように、最近是对前年伸び率の鈍化が目立つマネーストックであるが、季節調整済みの前月比では持ち直しがみられ (図表 12)、また、上述のとおり銀行貸出の伸び率も再び増勢を強めているため、懸念を強めなければならない状況ではないと思われる。